

障害とパフォーミング・アーツ研究会＜第1回＞議事録

日時：平成28年5月16日（月）14：00～17：30

会場：アーツカウンシル東京 大会議室

内容：主催者挨拶、研究会の主旨説明、参加団体の活動紹介①、意見交換

参加者（順不同）：特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（廣川理事長、萩原副理事長、石川事務局長、平野）、スロームーブメント実行委員会（橋爪、秋元、塚原）、サインアートプロジェクト・アジアン（大橋代表）、特定非営利活動法人みんなのダンスフィールド（村中、佐藤、加藤）、日本ろう者劇団／社会福祉法人トット基金（小池）、特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン（柴崎代表理事）、特定非営利活動法人シニア演劇ネットワーク（鯨理事長、遠藤副理事長）、劇団山の事情社／認定NPO法人ニコちゃんの会（倉品）

進行役：吉野さつき（愛知大学文学部メディア芸術専攻准教授）

アーツカウンシル東京出席者：杉谷企画助成課長、石綿オリンピック・パラリンピック文化戦略担当課長、佐野プログラム担当係長

佐野：本日は「障害とパフォーミング・アーツ研究会」の第1回に、皆様大変お忙しい中お集まりいただきまして、どうもありがとうございます。私はこの研究会を担当させていただきます、アーツカウンシル東京企画室企画助成課の佐野と申します。どうぞよろしく願いいたします。

まず最初に、この研究会を企画した趣旨をお話しします。アーツカウンシル東京には「東京芸術文化創造発信助成」（以下、「創造発信助成」）という芸術団体向けの助成プログラムがあります。加えて昨年から「芸術文化による社会支援助成」（以下、「社会支援助成」）という助成プログラムがスタートしました。今日お集まりいただいたのは、「創造発信助成」もしくは「社会支援助成」で私どもとお付き合いのある、障害のある方々のパフォーミング・アーツの分野で活動されている団体の皆様です。

「社会支援助成」は新しく始めた制度のため、実践者の皆様のニーズを正しく把握できているのか、現場に必要とされるスキームになっているのかといった課題があります。今後の支援のあり方や方向性を考えて、改訂していく必要もあると思っています。また2020年に向けて、アーツカウンシル東京では日比野克彦さんによる「TURNプロジェクト」という、いわゆるアール・ブリュットのプロジェクトがスタートしました。障害のある方々の美術活動の振興が盛り上がりを見せる一方、パフォーミング・アーツ

の分野についてはまだまだ支援が行き届いていない状況があると思います。

ですが、「社会支援助成」を開始したことで、障害のある方々のパフォーマンス・アーツの分野で、長年すばらしい実践を重ね、貴重なノウハウをお持ちの団体が数多く活動されているということが分かりました。と同時に、申請書類を拝見したり現場に伺う中で、複数団体の企画内容が一部重複していたり、同じアーティストやスタッフが複数の企画に参加している状況も見えてきました。もしかすると、必ずしも同じ分野で活動する団体同士の横のつながり、情報やノウハウ共有を行える場や機会がなかったのかもしれないという印象を持ちました。そこで、ぜひこの研究会の場が、まずはお互いのことを知り、情報交換や課題の共有、さらにそこから新しい企画や構想が生まれるような場になればと考えております。

皆様から「創造発信助成」や「社会支援助成」に対して、ここが使いづらいとか、こんな制度だったらもっと自分たちの活動が発展していくのにといったご意見、ご要望をお聞かせいただければと考えています。同時に、2020年オリンピック・パラリンピックに向けて今後さまざまな文化プログラムが展開されていきますが、そこに対しても、この場から企画提案等につなげていけたらと考えております。スケジュールとしては、年間7回程の研究会を開催し、最終的には何らかの形で活動報告ができればと考えています。以上が本研究会の主旨になります。

それでは、前置きが長くなりましたが、主催者を代表してアーツカウンシル東京企画助成課課長の杉谷よりご挨拶させていただきます。

杉谷：本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。企画助成課長の杉谷と申します。いわゆるソーシャル・インクルージョンという括りで、障害とパフォーマンス・アーツという分野の活動を文化行政の面から進める流れは、2012ロンドン・オリンピック時のオリンピック委員会が強く打ち出したということもあって、にわかに進んできたように思います。私どももそれを受けまして、昨年度から「社会支援助成」を始めましたが、今佐野が申し上げましたとおり、利用者のニーズにどこまで応じているのか、まだまだ検討が必要です。また、アーティストや都民の方へ更なる理解を広げていく必要があると思います。ぜひ皆様方の積極的なご提言や情報をお寄せ頂ければと思います。よろしくお願いいたします。

佐野：続きまして、オリンピック・パラリンピック文化戦略担当課長の石綿よりご挨拶させていただきます。

石綿：石綿と申します。オリンピック・パラリンピックの文化プログラムは今年から始まりますが、ロンドンのアンリミテッドの成功等のレガシーを、東京はどう引き継いでいくかが大きな課題になっています。ついては、障害のある方々のパフォーマンス・アーツをどのように支援していくのか、私どもとしてもきちんと考えていかななくてはいいけ

ない。なおかつ、2020年以降も皆様の創造活動が継続できるような豊かな環境をどう整備していくか、これに取り組むには今が非常にいいチャンスだなと考えています。これを機にきちんと検討し、現場の状況に則した支援のプログラムができればと思っています。ぜひ皆様から忌憚のないご意見、あるいは新しい企画等を出していただければと思います。よろしく願いいたします。

佐野：次に、この研究会の進行役をお願いしている吉野さつきさんです。

吉野：吉野です。愛知県の豊橋市にある愛知大学で、アーツマネジメントや、アートと社会の関わりについて教えています。以前、特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパンさんがやっていた「エイブルアート・オンステージ」という、障害のある方、ない方が協働して新しい舞台をつくっていくという5年間のプロジェクトに、実行委員として関わっていました。皆さんがこれから、円滑にいろいろな話し合いができるようにするための、ちょっとしたお手伝いをするような役割を務めたいと思います。もし声が聞こえにくかったり、早口だなということでも止めたほうがよければ、手話通訳の方も皆さんも遠慮なく仰ってください。この場が、一緒に協働していけるような接点を探っていく場になればと考えています。

佐野：ところで今回、研究会にお声がけしている団体は、全体で十数団体になります。

吉野：おいおい、今日来られなかった団体の方も入ってこられると思います。そこで、研究会の進め方として、最初の3回位は「初めまして、こんな活動してます」というお互いの活動紹介からスタートしていきたいと思います。その上で、それぞれ他の団体の方に、もうちょっとここが聞きたいとか、質問を投げかけていただけるといいですね。また、それぞれの活動の中で今どんな課題があるのかということも、後半のディスカッションでお話いただきながら、次回以降はグループに分かれてもっとお互いを知るような話し合いの場も作っていきましょう。では、どの団体の方から始めましょうか。

廣川：特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークの廣川麻子と申します。団体の理事長をしております。略して言うとT A - n e t（ターネット）で、手話表現もつくりました。皆さん今日、手話を1つだけ覚えて帰っていただきたいと思っています。（参加者に手話表現をレクチャーし）これがT A - n e tという手話です。手の運動をしていただくような感じで、覚えてください。覚えていただいてありがとうございます。

団体の目的は「みんなで一緒に舞台を楽しもう」ということです。この「みんな」という言葉に誰が含まれるのか。一般社会では「みんな」という言葉には、私たち障害のある者が入っていないことが多いわけです。そのため「みんな」という言葉にこだわり

を持っています。

T A - n e t は 2 0 1 2 年、聴こえない人で演劇が好きな人と、聴こえる人で演劇の好きな人が集まって設立しました。現在、会員は 1 0 0 名を超えています。主な活動は①鑑賞サポートのある公演情報の収集と発信、②支援方法の研究と実践、③相談受付の 3 つです。

まず、①観劇サポートのある公演情報の収集と発信ですが、障害当事者がなかなか文化活動の場に来ない、来られない理由は、やはり情報が足りない、十分行き渡っていないということがあります。ですので、その情報発信と、障害当事者からも劇団や劇場に情報を伝えていくことに取り組んでいます。ホームページを開設し、メルマガも始めました。様々なイベントに出向いて宣伝も行っています。

次に②支援方法の研究と実践として、例えば聴覚障害者が観劇する場合、台本の貸出を受け、それを読みながら舞台を観るのですが、台本を早く読めて、すぐに意味をつかめる人は少ないんですね。台本をコピーして渡せばオーケー、ではなくて、内容を要約する、そして手話で説明することでイメージを膨らませる、その上で台本を読みながら観劇するという取り組みをしています。他にも、モバイル機器の字幕アプリを利用して、無線で文字情報を飛ばして各自のモバイル機器で字幕を見ることも始めました。技術支援者の養成ということで、音声ガイド制作者や字幕制作者の養成も行っています。難聴の方で、手話でなく自分の耳で音を聴きたいという方のために、補聴器とは別に、特別な機器を提供できるよう専門の会社と情報交換を行っています。また、一般的な手話通訳養成講座だと、例えば病院へ行く時の通訳等が想定されていますが、T A - n e t では聴覚障害のある演劇人や鑑賞者にとって必要な、表現力のある手話通訳者の養成を行っています。

このような様々なサポートを成功させるために必要なのは、予算獲得、支援方法の技術開発、そして主催者や現場の理解の三つが大切だと思っています。

最後に、昨年度よりアーツカウンシル東京の 3 年間の長期助成（創造発信助成）を受けて、観劇サポート支援をしています。ただ、まだ手をあげる劇団や劇場が少なく、もっと有名なところとも組みたいと思っています。今日はもっといい方法がないか、皆さんと一緒に考えられたら嬉しいです。

倉品：山の手事情社という劇団の倉品淳子と申します。普段は俳優と、演出もしております。今年の 1 0 月頭に横浜と大阪で公演をやるのですが、今お配りしたのはその出演者オーディションのチラシです。身体に障害のある方を 2 名、募集しています。

最初に私の話をさせてください。と言いますのは、私が所属している劇団山の手事情社は障害のある方への演劇のアプローチというのはあまりないんです。ただ、私個人としては非常に興味を持っています。九州に「ニコちゃんの会」という認定 N P O 法人があり、そこの知り合いから 2 0 0 6 年に障害者の演劇をつくらないかと声をかけられました。でも経験がなく、日常生活で障害のある人との関わりもないし、どうやっていい

かわからない。それで、おばあちゃんとだったら一緒にやりたいと、60歳以上の女性を集めて、エイブル・アート・ジャパンさんから支援をいただいて福岡と東京で公演をしました。そこで、動きたいけど動けない、高齢者だけでなく、体が不自由という制約の中に劇的な効果がある、演劇の可能性があるということを見ました。

さらに、ロンドンパラリンピック開会式の演出をしたジェニー・シーレイさんと知り合い、彩の国さいたま芸術劇場で『R & J』という彼女の演出作品の演出助手をしました。それからイギリスに行き、ジェニーが主宰する「グレイアイ・シアター・カンパニー」という障害のある方のプロフェッショナルな劇団の稽古場兼事務所を訪ねたり、作品を見たりして、すごく可能性を感じたんです。体が自由な人が表現するよりも、逆に自由になると。これはおもしろいと思いました。例えば、野外劇ですけど、体の胴から下がらないおじさんがいるんです。

吉野：『アイアンマン』ですね。

倉品：大きなロボットの足元にそのおじさんがいて、ガシヤンガシヤン操作しているんですね。それでロボットがぐわーっと動くんですけど、とにかくすごい。ロボットとおじさんと、それで一つなんだと感ぜられて。そこに普通の男の人が座ってガシヤンガシヤンやっても、おそらく全然感動しないんですね。それでとうとう、身体障害のある方との演劇をやろうと決心しました。出演者を一般公募してワークショップをして、2015年に水上勉の「ブンナよ、木からおりてこい」を下敷きにした『BUNNA』という作品をつくりました。出演者はおばあちゃん5人と車イスの子が2人、耳の不自由な人と、一人だけ若い健常者の計9人で、みんなで創作したシーンを構成してつくる、構成演劇です。

この時に感じたことですが、みんなすごく頑張ったけれど、まだ表現になってない部分があるぞと思っていたにも関わらず、お客さんはものすごく喜んで、涙をぼろぼろ流して、今まで聞いたことのないような拍手が来たんです。それで「これじゃあいけない」と。同情とかではない評価を、きちんとお客さんが下さないと、こういった活動は伸びていかないんじゃないかと思ったんです。例えば、ろうの男性が演じた手話表現には、こんなに美しくて深い表現があるのだということを知りましたし、障害のある人たちの表現を追求することで、一般的な価値観を逆転することができると思っています。自分を表現したいけれど、家にいてこういう情報に出会えない人に「演劇をやる」という特別な体験を是非してもらいたい。そして、その特別な人の表現を見たい。どうしたらこの出演者募集の情報が色々な方に届くか、皆さん、お知恵がありましたら拝借したいです。

吉野：倉品さん、ありがとうございます。補足ですが、ジェニー・シーレイさんは「グレイアイ・シアター・カンパニー」という劇団の芸術監督で、耳の聞こえない演出家で

す。その劇団には作品をつくるスタジオというか稽古場があって、聴覚や視覚の障害だけではなく、様々な身体障害のある俳優が雇用され、活動しています。例えば、車椅子の照明デザイナーが照明機材を吊り替えられるように、稽古場の照明バトンがとても低い位置まで下りるようになっていたり、車椅子のままボタンを押せば、全てのドアが開いて稽古場との出入りができる。さらには稽古場の奥にメディカル・ルームがあり、稽古の途中で医療的な処置を受けられるような設備もあります。きっとこれから日本でも、皆さんの声でこのような環境が整備されていくと良いのではないかと思います。

ではNPO法人みんなのダンスフィールドの加藤さん、佐藤さん、お願いします。

加藤：みんなのダンスフィールドは1998年に発足しました。障害の有無にかかわらず、子どもから大人までが個性をぶつけながら活動している身体表現の団体です。映像をごらんいただきたいと思います。(短めの公演映像が流れる) これまで12回、舞台公演をしたり、地域の人が集まるイベントに招待されたり、誰でも表現することを楽しくめるように、いろいろなところでワークショップもしています。

吉野：初めて映像で見たんですけど、ダイナミックですごいですね。ここにはダンス系の活動をされている団体の方もいるので、つながっていくといいのかなと思います。

次はスロームーブメント実行委員会の橋爪さん、お願いします。

橋爪：スロームーブメントというのはパフォーミング・アーツのプロジェクトの名前で、元々は「スローレーベル」という団体及びプロジェクトが始まりです。今日は代表の栗栖良依が出席できないので、代わりに説明させていただきます。この団体の目的は、ちょっと固めですが、「多様な人々の出会いと協働の機会を創出し、誰もが居場所と役割を実感できる地域社会の実現に貢献する」というものです。きっかけは、横浜の「象の鼻テラス」という市の施設を拠点に始めた地域の地場産業とアーティストがものづくりをするプロジェクトで、障害者施設にアーティストを派遣したことです。そこから「スローレーベル」という雑貨ブランドができました。

「スローレーベル」の雑貨を象の鼻テラスで制作・販売する中で、施設職員だけでは手の回らない部分を一般の施設来場者に手伝ってもらう「ファクトリー」という企画を行ったところ、それが結構ヒットしたんですね。普段障害のある人と接する機会のない人が、一緒に手を動かす中で、自然に話したりすることをとても楽しんでくださって、「人が入り混じる」ところに価値があるということが分かりました。

ただ、ものづくりだと商品として売れるものにしなければならないという制約もあり、もっと自由な表現をしたいと考えて、2014年、横浜トリエンナーレの年に「ヨコハマ・パラトリエンナーレ」を新しく立ち上げました。これは障害のある人と多様なプロフェッショナルのアーティストが協働して、今までに見たことのないものをつくる、表現するもので、その一環としてパフォーミング・アーツにも取り組みました。それが「ス

ロームーブメント」に発展し、年齢、国籍、障害の有無を超えた人々が街中でパフォーマンスを展開しています。基本的に市民参加型で、出演者・スタッフは市民から募集し、衣装・音楽・振付を担当するプロのクリエイターとつくっています。体を動かしたい人はパフォーマーとして、ものづくりが好きな人は舞台美術を、その他にも市民スタッフとして参加してもらったり、いろいろな方法で参加できる仕組みを作っています。

また、技術開発もしています。海外のパラリンピック選手は軍人や元軍人の方など、もともと身体能力の高い人が活躍することが多いのですが、日本だとそういう選手は少なく、今は義足の開発やテクノロジーで金メダルを狙う動きがあります。先端技術というのは日本の特徴だろうということで、例えば音楽のヤマハ株式会社さんと乗り物のヤマハ発動機株式会社さんに、パフォーマンスのための車椅子をつくってくださいとお願いし、車輪の動きと連動して音が出る車椅子を開発しました。ヤマハさんからは「TLFスピーカー」という布状のスピーカーもお借りしています。昨年「創造発信助成」で助成を受けて、青山の国連大学前とスパイラル前、あと豊洲公園で公演を行いました。

課題としては、他の団体とも共通するかもしれませんが、パラトリエンナーレの時に海外から有名なゲストを招いて数多くのパフォーマンスのワークショップを行ったのですが、参加者が集まるだろうと思っていたら、全然集まらなかったんです。特に障害のある参加者が全然集まらなかった。原因は、個人に情報が届かない等の情報のハードル、あと介助者が必要だったり、やりたいけれど一人では来られないといった物理的なアクセスのハードル、また医療的な処置が必要なため参加できない等です。

中でも大きいと考えているのは、精神的なハードルです。「自分の子どもにはできない」「この利用者さんにはできないんじゃないか」という周囲の人の心理的バリアがすごくあると感じました。そこで2015年から、一緒に作品をつくる「アカンパニスト」と、環境を整える「アクセスコーディネーター」の育成に取り組んでいます。ものづくりと違って、パフォーマンス・アーツは多様な人が参加できるという長所がありますが、まずは環境を変えていかないといいものが生まれないのではと考えています。そのためにアカンパニストやアクセスコーディネーターを育てていこうとしています。これは、厚生労働省の「障害者の芸術活動支援モデル事業」という助成があり、美術寄りの制度なんですけど、その解釈を広げてパフォーマンス・アーツで申請して実施しました。

最後に、障害とかと距離があると思う人は、知識がないから手を差し出してはいけないとか、電車に乗る時は駅員さんに任せればいいとか思うかもしれませんが、そういうことではなくて、とりあえず困っているかどうかコンタクトしていけばいいのだと思います。そのためにスローレーベルは、創造団体というだけでなく中間支援団体として、障害のある人とない人が出会い、知り合いや友達になる場を増やすことに力を入れています。

吉野：若干補足をすると、代表の栗栖良依さんご自身、足に障害があり、今日は義足の検査のためご欠席とのこと。アクセスコーディネーターとかアカンパニストの話が、

もしかしたら異なる側面からアクセスのことをやっているT A - n e t さんとも接点が出てくる可能性に期待したいですね。鑑賞支援も創作支援も、最終的にはつながっているはずですから。

橋爪：鑑賞する人が増えると、やろうと思う人も増えますよね。

吉野：では、日本ろう者劇団（社会福祉法人トット基金）の小池紀子さん、お願いします。

小池：社会福祉法人トット基金事務局、兼日本ろう者劇団の制作を担当している小池です。代表は米内山明宏、ろう者の演出家兼俳優です。また代表代行は井崎哲也でトット基金に常勤しています。本日は法人と劇団のご紹介、特に力を入れている手話狂言をご紹介させていただきたいと思います。

トット基金は、1982年にトットちゃんこと黒柳徹子が創立しました。彼女が若い頃、ニューヨークで「ナショナル・シアター・オブ・ザ・デフ（NTD）」というアメリカのろう者劇団の公演を見て、余りのレベルの高さにびっくりし、これは絶対日本にも紹介しよう！と決心したことから発足したものです。障害者というよりは「視覚的に優れた人」の演劇をつくろう、聴こえる人も聴こえない人も共に楽しめる作品づくりをしようということで、40年近く前に活動を始めたのは、非常に先駆的だったと考えております。

また、手話狂言を思いついたのも黒柳です。ご存知のとおり、伝統芸能は幼い頃からの訓練が必要ですが、狂言で一番大変な訓練は発声なので、「声を出さなくていいんだから、やれる！」と閃いたのです。所作や動きは大人になってからでも大丈夫だと。始まりは1983年にイタリアのパレルモで開催された「世界ろう者会議・演劇祭典」に手話狂言で参加したことです。新しいジャンルの演劇をつくったということで、1987年に文化庁芸術祭賞を受賞しました。

指導は和泉流の三宅右近先生です。「僕はろう者だからといって区別はしない。同じように怒り、教える」と仰っている通り、稽古は非常に厳しいです。黒柳さんにしろ三宅先生にしろ、演劇をやる人は、障害に関係なく、演劇そのものに向き合っていच्छゃると感じます。

また、ここ4～5年は国際交流に力を入れています。文化庁からの助成金額が大きくなって旅費、滞在費に加えて舞台費の一部も助成してもらえますので、企画が立てやすくなりました。2013年にフランスのランスで開催された「フェスティバル・クランドゥイユ（国際ろう芸術祭）」では日本が名誉招待国となり、オープニング・プログラムを手話狂言が飾りました。これはランス市などの共催により2年に1度、障害を持つアーティストが世界中から集まるフェスティバルです。またロンドンのグレイアイ・シアター・カンパニーのスタジオでも、日本大使館から金屏風を借りてきたりして公演し

ました。

また、パリの「インターナショナル・ビジュアル・シアター」というろう者劇団と交流があり、その観客網で仏ろう者の観客を集め、2015年にはパリ日本文化会館で公演、さらに30数年振りにイタリア・ローマで公演を実現しました。これは文化庁「国際芸術交流助成」にあわせ、アーツカウンシル東京の「社会支援助成」を受けています。その際、2年前の教訓を生かして、欧州ろう者の共通言語とされる国際手話による上演に挑戦しました。狂言の台詞を現代語に訳して、イタリア語とフランス語の字幕をつけ、さらに国際手話を織り交ぜて上演することで、聞こえる日本人・イタリア人・フランス人、聞こえないイタリア人・フランス人と、全てのお客様にせりふを理解してもらえたと実感できる舞台となりました。

今回は映像や、その時のアンケートなども資料としてご覧に入れたいと思います。手話狂言をぜひ、オリンピック・パラリンピックの時に何らかの形で東京から発信したいと考えています。よろしく願いいたします。

吉野：ありがとうございました。それではエイブル・アート・ジャパンの柴崎さん、お願いします。

柴崎：エイブル・アート・ジャパンの事務局を担っている柴崎と申します。元々は「日本障害者芸術文化協会」という名前で、東中野に事務局を持っておりました。「アジア太平洋障害者の十年」で、障害のある人たちが当たり前前に芸術文化活動にアクセスすることができるようにと国の政策が動いた時に、全国の芸術活動をしている障害当事者と支援者の方たちをネットワークする組織として、1994年に発足しました。90年代に活発になってきた企業のメセナ活動による支援を活用しながら、活動を推進してきました。

その時につながった障害のある作家、支援者がどのように活動を成り立たせてきたかを分析したところ、創作環境をつくるのに支援者の存在が欠かせず、人材を育成して全国に広げていくことが大事だという結果に至りました。そこで、1996年からトヨタ自動車の支援を受けて、全国各地で支援者を育成するため「トヨタ・エイブル・アート・フォーラム」を開催しました。エイブル・アートの仕事の最初のターニングポイントになった事業と言われてています。

そして2003年、ビジュアルアーツの次はパフォーミング・アーツの分野で活動する人や支援者の育成が必要だという問題意識から、「エイブルアート・オンステージ」を開始しました。今日は2010年に出版した「生きるための試行～エイブル・アートの実験」をお持ちしていますので、必要な方にお持ちいただきたいと思います。ここの124ページ以降に団体情報を掲載していますが、毎年8団体を目途に150万円の資金を提供し、全国的な活動支援を5年間行いました。私は当時、奈良の福祉施設で地域に開かれたアートセンターの設立や著作権マネジメントに携わっていたので、オンステ

ージ事業は少し拝見した程度ですが、この時に種蒔きをした参加者たちが、非常に多くの分野で活躍されていることに感動しました。

エイブル・アートの仕事は、必要だけれども今はない仕組みやアイデアを社会に発信することだと考えています。2000年代後半から、次の課題だと考えて取り組んでいるのは、先ほどスローレーベルさんのお話にもありましたが、障害のある人たちのものづくりの可能性をどれだけ社会に発信できるかということです。一つは「エイブルアート・カンパニー」というライセンスビジネス事業です。これは国内の3つのNPOと協働し、約100人のアーティストの1,000点の作品をデータベース化し、企業の広報誌やファッション分野で使って頂くことで、アーティストに売り上げをお支払いするものです。環境維持に貢献しようという社会的事業です。

もう一つは「Good Job!プロジェクト」という、障害のある人たちの可能性を、巧みに仕事や社会参加の手段としている全国のNPOのプロジェクトを表彰するものです。これは民間の助成金等を活用して推進しています。

また2011年以降、東日本大震災の復興支援にかかわる事業体として活動しています。全国を見た時、障害のある人たちの芸術活動は「西高東低」とでも言いますか、西日本地域に歴史が古く活動をリードするNPOや社会福祉法人が集中していて、特にファインアートについては顕著です。けれども震災を機に東北地方に足を運ぶにつれ、障害のある人たちがまだまだ家から出てこない、あるいはそうした活動をみんなで応援するという眼差しが少ないという問題意識を持ちました。障害のある人が市民の一人として、当たり前前に絵を描いたり演劇をすることを、どうしたら地域の文化事業者と協働できるのか。そのためのネットワーク事業を、厚生労働省の「障害者の芸術活動支援モデル事業」として、200万人都市の宮城県で実践しています。

私たちの団体の特徴は、福祉施設、芸術文化関係者、教育関係者、最近では特に行政、企業など、あらゆるバックグラウンドの方たちや組織と協働しながら進めることです。5年前に東中野からアーツ千代田3331に事務局を移し、ギャラリーを持って全国各地の障害のある人の作品を紹介しています。

また昨年度、初めてアーツカウンシル東京の「社会支援助成」を受けて「アートとソーシャルデザイン」フォーラム～障害者アートは社会をかえるか～を開催しました。

今、私たち法人が東京での課題だと考えているのは、「どのように障害のある人たちに情報を届けるのか」「参加を促していけるのか」、また先程T A - n e tの廣川さんからもお話がありましたが、「一般の文化活動セクターの人たちと本当の意味での協働ができるのか」ということです。また、国の支援が大きくなるにつれて福祉施設の人たちには色々な情報やチャンスが届いていますが、先ほど倉品さんや橋爪さんのお話にもありましたように、在宅の障害のある人、手帳を持たない障害のある人、先天性の障害ではないけれども社会の中で生きにくさを感じている人に対して、芸術文化の可能性を届けることが、まだまだやれることだろうと思っています。華やかな舞台とか展覧会の一方で、本当にベースとなることへの取り組み、地味ですが大事な仕事をするのが、来る

べき年に向けてのエイブル・アートの仕事ではないかと考えています。

また、東京の持つ人材、資源、お金、そしてオリンピックというチャンスを、どうやったら地方に住んでいる方やこれまでの協働者の方たちに届けられるのか。東京を核にしながらも、オリンピックを契機に全国の障害のある人にとっても多くのチャンスを生むようにしたいと、プログラムを組み立てているところです。少しでも東京でのプログラムに関わりたいと思います。よろしくお願いします。

吉野：ありがとうございます。ちなみにお配りいただいた本は、もう出版元のフィルムアート社にも在庫が僅かだそうで、貴重な資料です。それでは、シニア演劇ネットワークの鯨さん、お願いします。

鯨：特定非営利活動法人シニア演劇ネットワークの鯨と申します。私が理事長で、副理事の遠藤いづみと参りました。「障害とパフォーマンス・アーツ」ということで、高齢者がどう絡めるのかなと思いつながら来たんですが、私どもの活動のきっかけは障害者の観劇支援なんです。

私は20代の頃から、劇団活動と並行して障害者の介助の仕事をしています。私のやっている芝居はほとんど小劇場で公演しますので、もうフルバリアなんです。暗いし、エレベーターはないし、段差ばかり。そこで何とか障害者の観劇支援ができないかと、「バリアフリーサービス」を始めました。ところが、やりがいは裏腹に、来るのは私が介助している障害者くらいで、なかなか広がらなかった。じゃあ、これからは高齢化社会だから高齢者にも対象を広げてみようと思いましたが、高齢の方が観たい芝居は私がやっている小劇場の芝居じゃないんです（笑）。それで、観劇のサポートではなく、演劇をやりたい人のサポートならできるかなと高齢者の劇団を立ち上げたのが2006年です。2007年問題、つまり団塊の世代がリタイアして第二の人生をどう生きるかといった話題がマスコミを賑わせていた頃です。先にお亡くなりになった蜷川幸雄さんが「さいたまゴールド・シアター」を立ち上げたということもあり、真似したわけではないんですが、向こうは55歳以上だったのでこちらは60歳以上にしたところ、ゴールド・シアターのオーディションに落ちた人たちがうちに集まってきたんです。最初は13人で、任意団体としてスタートしました。

公演には家族、親戚が総出で観に来て、拍手喝采を受けますので、劇団員はどんどんふてぶてしくなっていく（笑）。それで、もっと真剣に芝居をつくるように仕向けようと、刺激を求めて、地方のシニア劇団にジョイント公演をやりたいと手紙を送ったところ、15団体から「いいですよ」と返事がきた。それで「これ、演劇祭にしますか」となり、2011年に池袋で「第1回全国シニア演劇大会」を開催しました。全国大会をやったことで、助成金とかをもらうときに法人ではないことを必ず問われてしまい、本当にこれを継続していくのかという岐路に立たされたんです。ちょうど3.11もあり、高齢者演劇が年寄りの道楽というだけではなく、社会に対して何か貢献する要素、投げ

かけるメッセージがないと意味がないと思い、NPO法人シニア演劇ネットワークを立ち上げました。

やる側も観る側も演劇によって元気になるということを全国に伝えるために、2013年に第2回「全国シニア演劇大会」を南アルプス（山梨）で、2015年に第3回を仙台で開催しました。2017年は福岡でやることが決まっています。

また、機関誌を年に4回発行しています。高齢者なのでホームページはなかなか見ないし、携帯すら持ってない人もいればメールアドレスもないので、紙媒体がとても重要なんですね。老眼用に文字をこれくらい大きめにしてあげると、最後まで読んでくれるそうです。

先日、私が作・演出・企画をやっている「かんじゅく座」という劇団の第10回公演をしました。月謝を取りながら稽古していきまして、これが主な収入源になっています。現在はメンバーが40人位に増えて、3チームに分かれて活動しています。週2回活動しているチームと週1回のチーム、それからもうせりふを覚えるのが嫌になってしまった朗読のチームの3つです。入団資格は60歳以上ということ、自力で稽古場に来られることの2つです。デイサービスではないので送迎はしませんと言っていたのですが、10年活動する中で、認知症が出てきました。それからがん患者も多いですね。自分だけじゃなく夫が末期がんとか、孫が生まれて世話をしなきゃならないとか、90代の親の老々介護が始まったとか、高齢者は高齢者でもものすごく忙しいんです。その人がそういう理由で劇団を辞めなくてはならないのか、そういう人こそ息抜きの場が欲しいのではといった話をしていくうちに、こちらの対応も緩くなったというか、家庭状況や身体の変化に合わせて個別に対応するようになりました。「稽古にはこれしか参加できないけど、本番に出たい」という人にはセリフの少ない役をつくったり、「もうセリフが覚えられない」という人にはカンニングペーパーを仕込んでみたり。出演者の3分の2位の人に「あて書き」している状態です。皆さんには本番の舞台よりもぜひ稽古場を見に来ていただきたい、それくらい稽古場が大変です（笑）という活動をしております。

佐野：鯨さんは目の不自由な方の音声ガイドの制作もされてますよね。

鯨：そうですね。この間はT A - n e t さんとの共催で、音声ガイドをつくる人の養成講座をやりました。先日の「かんじゅく座」公演では、その講座を受けた方に入っていたいたり、細々と続けてます。

吉野：ありがとうございました。それでは少し休憩したいと思います。

（休憩）

吉野：それでは再開します。今日は手話通訳の方にいらしていただいておりますが、話が弾

みすぎて通訳が追いつかないこともあるかもしれません。お互いに、「大丈夫かな」と様子を見たり、「ちょっと待ってください」という合図をするなりしながら進めていきましょう。

廣川：あと、発言する時は手を挙げてください。誰が話すか分かりますので。

吉野：ここまでの話を少し思い出してみまじょうか。それぞれの団体から活動紹介があり、公演やイベントを行うだけでなく、表現のための環境整備や、インフラに近いところの基盤整備の話も出ました。高齢者の話もありましたが、アーツカウンシル東京さんの「社会支援助成」の枠組みは、障害者の芸術活動に限定していません。社会で生きていく際の課題、支援が必要とされるコミュニティであるとか、その課題に芸術を通して向き合っていくような活動がカバーされています。おそらく、各コミュニティの問題は別々ではないんですね。先ほどの鯨さんのお話でも、高齢になったことでさらにある種の障害というか、生きづらさが増えたりする。いろいろな問題が一人の人に複合的に関わってくることであると思います。そんなことも考えつつ、皆さんそれぞれの発表を咀嚼しつつ、ご質問などをお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

廣川：皆さんにお聞きしたいのですが、この仕事で生計を立てているのか、それとも別の仕事をしながらやられていますか？

吉野：表現やアートを仕事にしているのか、その関わり方ですね。

鯨 私の場合、収入源としては障害者の介助の仕事と、自分のNPOでの仕事、あとまだ役者業もしているのですがその出演料等で、それぞれ3分の1程度のバランスです。

吉野：他の方は、ご自分の生活を支えている仕事は何かしら芸術関係ということでしょうか。

廣川：今お聞きした理由ですが、私達の団体の場合は、この活動だけで生活している人はいません。他の仕事をかけ持ちしながら、空き時間を使って活動をしている状態です。そのため活動を広げていくにつれて難しい状況に直面しています。このあたり、皆さんの団体はどのように解決されているのかと。

柴崎：すごく生々しい話ですが、エイブル・アート・ジャパンは発足時、全国に会員が800名程いたんですが、現在は100名です。その理由は、当時会員だった方々が全国各地でご自身でNPOを立ち上げたことや、メセナ事業の規模が大きかった時代から今は小さな単位になっていること、また文化活動の中間支援組織や助成財団が充実して

きたことなどがあります。うちは専従職員2名ですが、恐らく同年代の人の給与には果てしなく及ばない金額ですので、自分達も研究事業や助成事業を申請しながら、さまざまな仕事を兼任して何とか暮らしを成り立たせています。2020年に向かってオリンピック関係の助成金が大きく広がってはいますが、それに集中するのは難しいというのが正直なところです。

倉品：私を呼んで障害者演劇をつくっている「ニコちゃんの会」は、障害者の日常的なケアをやっている事業所です。演劇をやると赤字が出てしまうので、その会のプール金というか、自己負担金でやっています。非常に厳しい状態ではあります。

石川：T A - n e t の石川です。芝居をやる人の収入は本当に低いと思います。鯨さんのお話にもありましたが、介助者の給料も安いという話を聞きます。スローレーベルさんもアクセシビリティの支援をやっていますが、仕事の内容はプロであるべきなのに、報酬が少なすぎるのではないかと。これは、全国的にそういう仕事に対する評価が低いからだと思います。そのあたり、皆さんはどのようにお考えになりますか

鯨：介助者の収入は、全国平均の月収より10万円以上低いと思います。残業手当も月に10時間までとか。それでも、やりがいがあったり、離職が多いのでやめられない状況です。今、職場で労働組合を作って闘っていますが、それだけでは限界があるので、1年に一度は厚生労働省に現行制度の見直しを求めて交渉に行くんです。すると、現場を知らない官僚が制度をつくっている。官僚にいかにも現場を見せるかということが大事なんです、なかなか足を運んでくれません。障害者に芝居を観に来てほしいけれど、介助者がいないから行けないという状況も、制度が改善されない限りなくならないと思います。

吉野：みんなのダンスフィールドのお二人は、いかがですか。

加藤：僕達も介助が必要な部分があつて、区に頼むと時間がかかるし、医者がないといけないとか、制約が多い。介助者や保護者にどう参加してもらおうかを考えています。

佐藤：私はこの3月まで介護事業所で働いていたのですが、仕事としての介護だと時間制限がものすごいです。1カ月単位で計画が決まっていて、急にどこかに出かけたいとか、劇を見に行きたいとかいうことがあってもなかなか難しいです。

佐藤：もし現場に手伝ってくれる人がいると、行きやすいんです。稽古場とか劇場まで行くには、福祉タクシーがある。そういうのを使っても、結局、劇場に入ってからが困る。

廣川：佐藤さんに質問ですが、例えば介助をお願いした場合、目的によっては断られるようなこともあるんですか？例えば趣味の場に行きたい時に「それは遊びだからだめです」というようなことを言われたりするのでしょうか。手話通訳の場合は、地域によって制度が違い、例えばある区の場合は比較的趣味の活動などにも無料で派遣してもらえます。でも、他の地域の場合は病院に付き添う時だけとか、就職活動の面接の時だけというところもあります。若いろうの人達は病院にも行かない、就職活動も1回決まればその後はないわけで、普段の生活、演劇の活動で通訳が必要な時は趣味だからだめ、という扱いをされます。介助の場合はどうなのかなと思いました。

佐藤：旅行には介助は認められていません。

廣川：公演ツアーのような時はどうされるんですか？

佐藤：みんなのダンスフィールドは仲間同士で助け合っている団体なので、介助は受けていません。

吉野：介護の場合はおそらく、まず医療的にできる、できないといった資格が必要になりますよね。エイブルアート・オンステージで、大阪の「DANCE BOX」のプロジェクトが一年後に桜美林大学に呼ばれた時、カテーテルの処置ができる人が必要で、資格のある人を東京で探さなければならないということがあったと聞きました。

橋爪：アクセスのスタッフについて、まずお金のことで言うと、うちは去年から始めたのでまだ3人位ですが、フルタイムで雇うことはできません。公演がある時に、何日来るからいくらで、といった支払い方をしています。アクセスコーディネーターは、手話ができる人／できない人とか、必要な処置や介護など、専門とする内容が違うので、多分これからネットワーク化していく必要があると思っています。手話が必要な時はT A - n e t さんをお願いするとか。難しいと思う点は、どこまでをアクセスコーディネーターがやるか、それが正当な要求なのか過剰な要求なのかを、どう見きわめるかということです。今は、稽古場に来るのは自力でやってもらい、そこから先の表現をつくる部分をサポートしています。送迎はしませんが、車椅子の人にはこういう経路で来たら良いといったアクセスの情報を提供したり、先ほどシニア演劇ネットワークさんの話にもありましたが、メールが機能しないケースが多いため、例えばダウン症の子ども達のお母さんには、メールだけじゃなく電話もして、不安はないかお聞きしたりという事前のケアも行っています。

柴崎：それに関連して、「社会支援助成」に応募した時、私達は今回のフォーラムにフ

ルで手話通訳をつけたのですが、T A - n e t さんの料金表を見て相場を知ったおかげで、予算に修正で入れることができました。またスローレーベルさんのアクセスコーディネーターのような役割は、これまではスタッフが業務の一環としてやっていましたが、予算書の中に専門家の謝金として計上するなど、今まで計上していなかった予算を明らかにし始めることもできました。そういう経費を必要経費として計上するとか、業務として保障するという意識を、この場にいるようなNPO側からどんどん発信していくと良いと思います。そんな当たり前の社会を実現していくためにも、公募ガイドラインにも費目が明記されているといいなと思います。

佐野：それは確かにそうですね。現状、助成対象経費に（手話）通訳謝金は入っていますが、アクセスコーディネーターのようなお仕事に対しての謝金は、対象経費として書き込んでいません。検討が必要だと、今お聞きして思いました。

鯨：手話通訳者が区によって派遣できたりできなかつたりするなら、まずそこから変えていく必要がありますよね。私がやっている活動も、どれほど認知症予防になっているか、独居老人の希望になっているかと役所に訴えても、「数字で表してください」とか言われるわけです。みんなで賢く連携して、行政に働きかけて抜本的に変えてもらわないと、先に進まないですよ。特に介助者の問題は、根本的に人手不足なんです。また、介助者の待遇がなかなか改善されないその裏に、障害者の1割負担という問題もあるんです。障害者が給付金をもらう時、その1割を自分が支払わなければいけないという制度が変わってから、ヘルパーと障害者の対立が始まってしまった。障害が重度の人ほど負担額が大きくなるという、矛盾した制度になってしまっています。こういうことはヘルパーが訴えてもだめで、当事者が訴えないと変わらないです。

吉野：高齢者の介護保険も似たような問題を抱えていると思います。障害があって高齢になった時、問題がさらに上乘せされていく。でも、障害があろうがなかろうが、高齢になっても、「やりたいことをやりたい」という話につながっていくことだと思います。また、文化芸術活動に対するアクセスのサポートが、どこまで生活に必要なこととして認められていくかも、同じ問題が絡んでいますよね。

倉品：ちなみに、日本財団の助成項目には「出演料」というのがないんです。俳優の出演料が助成対象であれば、少しでも払えるじゃないですか。俳優として見ていないというか、そういう扱いは何とかならないかと思っています。

佐野：アーツカウンシル東京の場合はあくまでも活動助成で、残念ながら運営費、間接経費は対象外ですが、飲食代等一部の経費を除けば、活動に必要な経費は基本的に全て助成対象になっています。

小池：うちは社会福祉法人なので、NPOさんよりも恵まれているかと思います。先ほど言いそびれましたが、法人の根幹として、就労支援施設を運営しており、劇団活動は公益事業として運営しています。障害者総合支援法により、昔は「措置費」だったのが、現在は利用者（障害者）に対するサービスの対価として、「介護給付費」として支払いを受けています。高齢者の介護給付と同じく、皆さんが支払われている介護保険料が財源であり、誰もが障害を持つ可能性があるという考え方に基づいた保険制度なのです。利用者さんの1割負担も制度改正の頃は大変でしたが、だいぶ落ち着いてきて、うちの利用者さんも基本は1割負担ですが、その人の財産とか預金の有無などが加味されて、うちでは現在、自己負担のない利用者さんもいます。劇団の運営は公演収入などで賄っていますが、間接経費を負担しなくて良いという点は恵まれていると思います。でも出演料、スタッフ料までは難しいですね。そこでうちの場合は手話教室をやって補っています。でも、NPOさんの場合は厳しいでしょうね。

皆さんに伺いたいのは、チケット代について、障害者割引をつくっていらっしゃいますか？うちは原則、障害者割引はつくらない代わりに、席によって2,500円から5,000円まで選択肢を増やしています。

鯨：障害者割引は1度考えたことがあります。当事者に相談した時に、逆に人権問題になるというか、「障害者だって一人前なんだ」みたいな勢いの方が強かったので、障害者も同料金にして、代わりに介助者を無料にしています。

廣川：ある公立劇場の場合、10%の障害者割引がありますが、その他のサポートは何もありません。私たち聞こえない立場としては、割引は要らないからきちんとサポートの準備をして欲しいという気持ちです。

石川：観劇サポートへの考え方ですが、去年、T A - n e t でイギリスに視察に行った時、舞台に手話通訳がついているのを見ました。その場にいた観客たちにインタビューしたら、「手話通訳がついていても全く邪魔だとは思わない」とのことでした。また、日本では字幕はモバイル機器で個々に見ることが多いですが、イギリスではみんなが見えるような場所に大きくついています。聞こえる／聞こえないは関係なく、字幕があるのが当たり前という考え方です。私たちとしては、希望する観劇サポートの詳細は当事者に聞いて欲しいし、観劇サポートの対象は誰なのか、障害者当事者だけが受けるものではなく、本来はその劇場全体で受けられるサービスであるということを考えてほしいです。

吉野：今、鑑賞アクセスの問題と、そうした活動に参加するためのアクセスや、通訳や介助の問題といった制度の話が出ていますね。例えばエイブル・アート・ジャパンの、アーティストの仕事として成立させていこうという試みですが、美術分野は作品を売っ

たり、コラボレーションして企業で商品になってロイヤリティーが入ってくる例があります。では舞台芸術の分野で、佐藤さんや加藤さん、廣川さんたち当事者が、そこで線を引きのもどうかという話がありますが、どうしたら「仕事」という領域まで持っているかということ、少し聞けたらと思います。

柴崎：先日私どもが行ったフォーラムで、ちょうどそのことについて話し合ったんです。障害のあるダンサーで女優の森田かずよさんが、二つの課題があると話していました。一つは、余暇としての演劇なのか、プロとして生きていくパフォーマーとしての演劇なのかが今のところ分かれていないこと。もう一つは、もしプロになりたい場合はアカンパニストのような、ずっと支援をしてくれる人が必要なのに、いないと。

疋田：エイブル・アート・ジャパンは中間支援団体なので、例えば俳優募集のチラシをいただいた時に疑問になるのが、それは本気で俳優として生きていきたい人を募集しているのか、やってみようかなという人を募集しているのかが、分かりづらい。

倉品：私、本気で人を探しているんです！

柴崎：その本気度というか、それこそ現場の方がどのように感じていらっしゃるのかをすごく聞きたいと思いました。

倉品：ただ、本気の人を探しているんですが、全く食べられないんですよ。まずは、高い芸術性のあるもの、「遊びでしょう」と言われないような芝居をつくっていくことしか、今のところ方法が見つかりません。

柴崎：イギリスのアンリミテッドの人たち、ジェニー・シーレイさんやジョー・ヴェレントさん（アンリミテッド・プログラムのシニア・プロデューサー）といった方々が、今たくさん来日していますが、彼女たちは国を出て活躍する「当事者リーダー」なんですよね。追いかける次の世代にも、自分達もああいうことを職業にできるんだということが分かりやすく見えている。だから、日本でも例えば廣川さんのように賞（平成27年度文化庁芸術選奨芸術振興部門文部科学大臣新人賞）を受賞したような人たちがどんどん表に出ていくことで、自分たちも演劇人として、コーディネーターとして、職業として成り立つんだということをアピールすることが、今とても大事だと思います。でも、まだまだ事例は少ない。

もう一つ、ずっと気になっているのが、ロンドンではアンリミテッドの決定権を持つ中に障害当事者がいましたが、アーツカウンシル東京は少しそこが弱いんじゃないかと思います。審査の場や、代表して意見を言える特別職など、意思決定の場に、本当に意見を言える、この界限を引っ張っている人たちが入ることが、今後4年間でとても大事

だと思えます。

また、東京都歴史文化財団には多彩な専門家がたくさんいて、学芸員同士の研究会もあると思うんですが、その方たちこそ、例えばこの研究会と一緒に座しているとか、研究会の構成員にNPOのスタッフが入るとか、共存する場がもっとあっていいのではないのでしょうか。

佐野：一つお伝えし忘れてましたが、本日お配りした出席者名簿に「サインアートプロジェクト・アジア」の大橋ひろえさんのお名前があるんですが、体調の関係で急遽お休みになりました。大橋さんも、先程柴崎さんがおっしゃっていた障害者リーダーを積極的に支援して行って、若い人たちが目指していけるような存在を育成することが必要だと、強く主張されていました。アーツカウンシル東京含め、これから我々が率先してリーダーを生み出していくことが、とても重要だと思っています。

吉野：イギリスでは、障害のある演出家やプロデューサー、アーティストが仕事をできるようにするため、「アクセスワーカー」という人たちがいます。今、ちょっとルールが厳しくなって大変だと言っていました。公的機関などへ申請すればほとんど自己負担なく、日本よりずっといい条件で雇える。その整備が日本にはまだ全然ないので、こういう問題が出てくるのは当然だろうと思います。ジェニー・シーレイさん本人に聞いたら、ロンドンオリンピック・パラリンピックのセレモニーのディレクター職はほぼ「取りに行った」と。元々、障害のないディレクターの名前が候補に上がっていると聞いた彼女は、「それをやらせたら、結局今までと同じことになる。当事者がディレクションをして、当事者のアーティストをいっぱい採用して実施しなければ、何にもならない！」と思って、いろいろ頑張った結果、マーティン・グリーンさんというヘッド・オブ・セレモニーを説得することに成功したそうです。その結果、マーティンさんも今は、本当に変えて良かったと言っていると。決定機関や委員会の中に当事者を起用していくことを、国から、またアーツカウンシル東京から考えていけるといいと思います。

廣川：加えて、ジェニーは今まで日本で4回、ロンドンパラリンピックの経験談を話していますが、不思議なのは、オリパラ関係者が多数いらしてると思うのですが、当事者を委員などに呼ぼうという機運が生まれていないことです。

橋爪：スロームーブメント実行委員会でも、先日「社会支援助成」でジェニーさんをお招きして「障害の先にあるパフォーマンスが社会にもたらすもの」というシンポジウムを開催したり、あとワークショップもしましたが、雪が降ったりということもあって参加者は少なかったです。

吉野：次回以降、こういう議論の時間を長くとれるようにしながら、話をしていく中で

出てきた課題を、ある段階まで来たら整理し、例えば東京都であれ国であれ、提言というかたちか何かで出していけると良いですね。制度的なことも、予算的な措置も、ここから上がった声を変えていくようなことになればいいと思います。

もう一つ、それぞれジャンルや立ち位置が少しずつ違いますが、ここにいる人たちが協働したらどんな可能性があるだろうか、緩やかにつながった時にどういう新しいことができるだろうかということも、話しながら見つけていけたらいいかなと思います。

それでは、こんなところで終わりたいと思います。次回以降もよろしくお願いします。皆さん、お疲れさまでした。

(了)